

スポーツ研究センター紀要

第2号

2017年3月

追手門学院大学

OTEMON GAKUIN UNIVERSITY

JOURNAL OF SPORTS RESEARCH CENTER

No.2

March 2017

Articles

- Relationship between a Laughter and Physical Ability
– An Examination of Instructor Evaluations –
..... Yoshihiro TATSUMOTO 1
- Characteristics of disabled person participating in synchronized swimming
..... Juri TATSUMI and Ken SUMIDA 7

SPORTS RESEARCH CENTER
OTEMON GAKUIN UNIVERSITY
2-1-15, Nishi-Ai, Ibaraki, Osaka, 567-8502 Japan

追手門学院大学

スポーツ研究センター紀要

第2号

2017年3月

論 文

笑いの表情表出と身体能力の関係－指導者評価からの一考察－

..... 辰本 頼弘 1

資 料

障害者シンクロ実施者の特性

..... 巽 樹理 7

笑いの表情表出と身体能力の関係
－指導者評価からの一考察－

辰 本 頼 弘

追手門学院大学

Relationship between a Laughter and Physical Ability
－ An Examination of Instructor Evaluations －

Yoshihiro TATSUMOTO

Otemon Gakuin University

Abstract

The coach of a university women's soccer team was asked to subjectively rank 16 team members in terms of their laughter frequency and physical ability during practice. The correlations among laughter frequency, physical ability, and weight training were examined using training focused on leg strength.

The rankings of laughter frequency and physical ability showed a positive correlation of 5% (.521), suggesting that people who laugh more often may also have demonstrated higher physical ability. Results also indicated that the higher a person ranked in frequency of laughter, the more she could lift her leg for the leg curl and leg press exercises, while the opposite is true for the bench press.

キーワード：笑い、身体能力、指導者評価

Keywords : Laughter, Physical Ability, Instructor Evaluations

I はじめに

スポーツ場面においてみられる笑いの表情は、試合や演技が終わり緊張感から解かれての安堵の笑い（ほっとした笑い）や勝利が決定した瞬間に自然発生的にでる笑い（ガッツポーズを伴う歓喜の笑い）、さらにミス等をしてしまった時にでる笑い（照れ笑い）など、状況により表出される笑いの意味は異なる。

スポーツ場面での笑いは、時には集中力の無さと判断され、特に、ミス等をしての照れ笑いでは、しばしば「笑うな」や「白い歯をみせるな（ニヤニヤするな）」という叱咤の声を聞くことがある。監督やコーチ等の指導者からすると、「選手がミスをしてしまう⇒それに伴う笑いが表出される」ことは、「選手自身の集中力が薄れているのではないか⇒それにより、またミスをするかも知れない」と負の連鎖の発想が全体の采配やチームの指揮に少なからず影響を及ぼすと考えられ、勝敗を分けるスポーツでは注意集中の持続が重要で、そのような状況下では笑いは生じない（生じてはいけない）との思いが根底にあるといえる。

しかし、笑いには精神的なストレスを解消する以外に、身体をリラクゼーション状態に保つという効果もあり、笑いの分類でも、スポーツ場面においては「快の笑い」と「緊張緩和の笑い」が大きく関わることが考えられる。

スポーツ選手は、より高いパフォーマンスを発揮するために、各種心理技法（自己分析・セルフトーク・サイキングアップ・ルーティン等）を用い、その能力の改善を試みている。

なかでも誰もが簡便に発することができる「笑い」を取り入れた情動のコントロールを身につけることは身体的リラクゼーションにもつながり、自身のパフォーマンスを身近に発揮できる環境につなげられる可能性も考えられる。

最近、トップ選手の中にも、プレー（練習や試合）前のミーティングやプレー中に意識的に笑いの表情を作る選手がいたり、各種競技においても笑いを意識的に取り入れプレーをするチームや場面の報告がされている。

これは笑うことで、顔の筋肉がほぐれ、それが神経伝達により全身に伝わり、身体全体のリラクゼーションにつながり緊張の緩和に効果が期待できるとされているからである。

本研究では、この笑いとスポーツパフォーマンスの関係に注目し、日頃選手たち（女子サッカー選手）を指導

している監督に、練習時に選手たちがグラウンドでみせる笑い（笑顔）の表出頻度と練習時の選手たちの身体能力を主観的に順位付けをしてもらい、この両項目の関係を、さらに、笑いの表出頻度と選手たちのウエイトトレーニングの結果との関係を検討することを目的とした。

II 方法

1. 笑いおよび身体能力の主観的評価

大学体育会に所属する女子サッカー部監督に、選手16名（3年生1名、2年生6名、1年生9名）の練習中にみられる笑いや笑顔（ここでの笑いや笑顔は、単に可笑しさから発せられるものだけではなく、全体を鼓舞する明るさや声かけ等により表情に表出されるものも評価してもらった。以下、笑いと表現する）および身体能力（ここでの身体能力は、サッカーのポジションでの要素は考慮せず、体力面・技能面をはじめ身のこなしや場面適応等、総合的な判断によるものとして評価してもらった）の両項目について主観的に順位をつけてもらった。この両項目の順位については特定日の順位ではなく、普段からの練習を指導する中で監督が主観的に判断をした順位である。（表1）

表1 大学体育会女子サッカーチームの監督からみた選手の笑いおよび身体能力の順位

NO	学年	笑いの順位	身体能力の順位
1	3	16	10
2	2	1	9
3	2	5	7
4	2	11	14
5	2	2	2
6	2	14	6
7	2	8	11
8	1	6	5
9	1	7	8
10	1	4	4
11	1	3	3
12	1	13	15
13	1	12	12
14	1	15	13
15	1	10	1
16	1	9	16

*監督の主観的判断による順位

2. ウエイトトレーニングの測定記録

部員16名に2016年3月29日に練習の一環として実施した脚筋力を中心としたウエイトトレーニングの記録であ

る。なお、No11およびNo15の選手は怪我のためベンチプレスのみを実施した。(表2)

これら、笑いおよび身体能力の主観的評価、ウエイト

トレーニング各種数値との関係は、Spearmanの順位相関係数を算出し検討を行った。

表2 部員の体重・ウエイトトレーニング*拳上重量の結果

NO	学年	体重	ベンチプレス	レッグカール右	レッグカール左	レッグプレス右	レッグプレス左	レッグエクステンション右	レッグエクステンション左
1	3	55.4	50	33.7	47	108	98	52	52
2	2	52.5	52.5	47	47	88	88	41.5	38
3	2	47.8	37.5	33.2	29.5	78	68	34.5	31
4	2	60	45	43.5	42	88	78	41.5	41.5
5	2	60	47.5	58.2	52	98	98	59	59
6	2	57.5	52.5	48.2	45.7	68	68	41.5	38
7	2	56.3	47.5	43.2	39.5	88	78	41	38
8	1	52.2	45	29.5	27	78	68	34.5	31
9	1	52.9	45	29.5	30.7	68	68	34.5	20.5
10	1	54.3	42.5	37.7	29.5	98	98	34.5	38
11**	1	55.5	42.5						
12	1	57	45	23.2	19.5	88	78	34.5	34.5
13	1	53	45	26.5	27	68	58	34.5	31
14	1	60.4	47.5	38.2	29.5	78	78	38	41.5
15**	1	48.2	45						
16	1	59.2	47.5	40.7	40.7	78	78	55.5	59

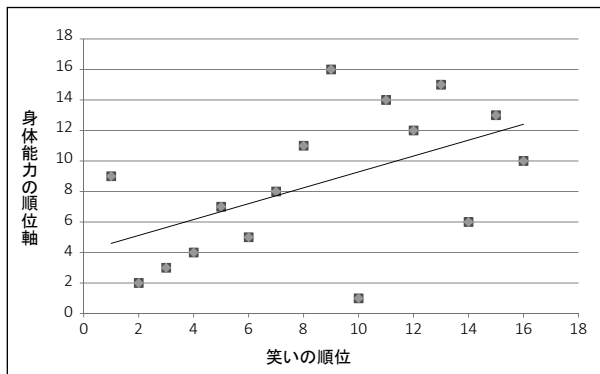
* 体重・ウエイトトレーニング結果は、2016/3/29の記録である (すべてkg)

** No11およびNo15は、怪我のためベンチプレスのみ実施

表3 各項目間での相関係数

笑いの順位	笑いの順位		身体能力の順位	体重	ベンチプレス	レッグカール右	レッグカール左	レッグプレス右	レッグプレス左	レッグエクステンション右
	身体能力の順位	体重								
身体能力の順位	.521*									
体重	0.27	0.431								
ベンチプレス	0.297	0.248	.567*							
レッグカール右	-0.229	-0.22	.664*	.618*						
レッグカール左	-0.139	-0.206	0.463	.696**	.827**					
レッグプレス右	-0.19	-0.122	0.25	0.104	0.268	0.38				
レッグプレス左	-0.187	-0.103	0.494	0.309	0.444	0.53	.914**			
レッグエクステンション右	0.074	0.092	.700**	.743**	.785**	.879**	0.383	.541*		
レッグエクステンション左	0.166	0.19	.789**	.542*	.670**	.659*	.556*	.715**	.881**	

**p<.01 *p<.05



身体能力順(y)=0.521 × (笑顔順位(x))+4.075, r=0.521(r²=0.271), p<.05

図1 笑いの順位と身体能力の順位との関係

Ⅲ 結果

図1は選手の笑いの順位と身体能力の順位を示したものである。また表3は、各項目間での相関係数を示したものである。今回は選手16名と対象者が少数であるが、笑い順位と身体能力順位には有意な相関関係 (r=0.521, p=0.039) が認められた。すなわち、笑いの表出が出ている選手ほど身体能力も高いことが推察される。ただ図1に示すように、笑いの順位が10位以降の下位の選手は、笑いと身体能力の関係にばらつきが多くみられた。また笑いの順位とウエイトトレーニングの結果をみると、両項目には有意な関係はみられないものの、相関

の正負では、笑いの順位が上位であるほどレッグカールやレッグプレスは重量が挙げられることを示し、逆にベンチプレスやレッグエクステンションは重量を挙げることができない結果が示されている。

ウエイトトレーニングの項目間についてみると、ベンチプレスとレッグカール左・右 ($r=0.696 \cdot r=0.618$) およびベンチプレスとレッグエクステンション左・右 ($r=0.542 \cdot r=0.743$) に有意な相関関係がみられ、レッグカールの左と右の間にも ($r=0.827$) 有意な相関がみられた。また、レッグカール右とレッグエクステンション左・右 ($r=0.670 \cdot r=0.743$) およびレッグカール左とレッグエクステンション左・右 ($r=0.659 \cdot r=0.879$) にも有意な相関関係がみられ、さらにレッグプレスの左と右の間にも ($r=0.914$)、レッグプレス右とレッグエクステンション左 ($r=0.556$) およびレッグプレス左とレッグエクステンション左・右 ($r=0.715 \cdot r=0.541$) にも有意な相関関係がみられた。

IV 考察

スポーツ場面において監督の指導は、練習時では選手の技術向上や戦術の確立等のゲームを想定した内容になり、ゲーム時では勝つための方策を模索する中で、培ってきた戦術を的確に選手へ指示したり、選手の力量が発揮できる場を整えたり等、どちらも多岐にわたる内容が考えられる。スポーツでは、「勝者や敗者」、「成功や失敗」等、明暗を分ける場面が必ず存在するがゆえに喜怒哀楽の場面がつきまとう。この明暗は選手が引き起こすものであるが、それゆえに選手自身、またチーム全体、さらには観客にも悲喜こもごもの様子が存在する。

基本的にスポーツ場面における笑いの表出は、選手が主となるインプレーの場面では目筋の展開が精一杯で当事者に笑いが起こることは考えにくく、インプレーから解放された瞬間（プレーの振り返り）やオフプレーで離れている時（他者のプレーにて）に笑いが起こる。すなわち選手自らが笑う場合と他の選手が笑う場合（集団として笑う場合も含む）に分類される。（また観客がいる場合は、プレーとして関与していない第三者の笑いも加わる）

特に、選手においては、冷静さを保ちながらプレーをすることは重要なことであるが、過緊張により練習中や試合中にイメージ通りのプレーが出来ない時の方策のひとつとして、情動コントロールでの笑いや笑顔の表出は

有効で、プレーに行き詰った中で余裕を取り戻したり、余裕を生み出したりする原動力になる可能性も考えられる。また選手自身の情動コントロール以外にも、チーム全体として笑いの表出を伴う鼓舞する明るさや声かけは、場の雰囲気高め、チームの一体感が生まれる効果が高いと推察される。これら様々な要因で表出される笑いは、展開される場面状況により笑いの頻度や強さが違うことは明らかであるが、今回女子サッカー部監督が長期間に渡り選手を指導している中で、主観的評価としての笑いの順位評価と身体能力の評価順位には有意な相関係数 ($r=0.521$) が認められることから、監督はチーム全体を盛り上げ明るい雰囲気や笑いの表出が多くみられると判断している選手の方が身体能力が高いと評価をしていることが伺える。言い換えれば、監督が身体能力が高いと判断している選手は、プレー場面において余裕があり、自身のプレー以外にも全体の目配せや雰囲気作りを積極的にすることが可能で、この余裕が笑いの表出順位につながっているとも考えることができる。

今回は練習場面での評価であるが、実際の試合においても笑いが頻出する明るい雰囲気の選手の方が監督の選手起用や采配に適応する要素は高くなると考えられ、チーム全体の指導において、情動コントロールとして笑い（明るい雰囲気）を取り入れる練習や指導はチーム作りとして有効であるかも知れない。

また、今回測定したウエイトトレーニングでは、各種項目間において相関関係がみられるものが多くあり、筋力強化のバランスについては必要であることが示唆された。しかし、笑いの順位とウエイトトレーニングの各種目間には相関関係がないことから、笑いの表出が多くあり、明るい雰囲気やチームを鼓舞する要素と筋力とが関連しないことが明らかとなった。ただし、相関関係はないものの、笑いの順位が上位の選手は、レッグカールやレッグプレスに関して重い重量を挙げられる傾向がみられ、逆にベンチプレスやレッグエクステンションでは重い重量を挙げることができない傾向がみられた。これに関しては更なる検証が必要であると考えている。さらに、身体能力の順位とウエイトトレーニングの各種目間でも相関関係がないことから、グラウンドで監督が評価する体力や技能、また身のこなしや場面適応能力と実際の筋パワーには関係がみられない結果となった。監督の立場からすると、笑いの順位および身体能力には相関関係がみられたことから、ウエイトトレーニングにおいても同

様の関係がみられることが選手起用や選手指導の裏付けになり有効であると考えられるが、今回のデータではそれを立証することができなかった。

今回は、対象者が少数で、かつ監督を軸として主観的に選手たちの評価を実施してもらったが、今後データの客観性を高めるために監督以外のスタッフについても協力をしてもらい選手たちの評価を実施する必要がある。また、各種スポーツ競技の特性についても調査を実施し、選手が表出する笑いと身体能力の関係について十分検証することができれば、スポーツ指導の中でのコーチングのひとつとして笑いを導入することも可能ではないかと考えられる。

V 結論

本研究は、大学女子サッカー部監督に、部員16名の練習中の笑いの表出頻度と身体能力を主観的に判断してもらい順位をつけてもらった。また、脚筋力を中心としたウエイトトレーニングの結果もふまえ、笑い・身体能力・ウエイトトレーニングの関係を考察した。

結果、笑い表出の順位と身体能力順位との間には5%水準で正の相関(.521)がみられ、笑いがよくみられる者ほど身体能力が高い可能性が示唆された。さらに、相関関係の正負をみると、笑い表出の順位が上位であるほど、ウエイトトレーニングでのレッグカールやレッグプレスは重い負荷を挙げることができる反面、ベンチプレスやレッグエクステンションでは重い負荷を挙げることが出来ないことが示された。

文献

- 藤原裕弥 (2015) : 笑い と 笑顔 が 心 身 の 健 康 に 及 ぼ す 影 響 . 安 田 女 子 大 学 紀 要 43 : 67 - 75.
- 石原俊一 (2007) : 自律神経系に及ぼす自発的笑いの実験的検討. 「人間科学研究」文教大学人間科学部 29号 : 51 - 59.
- 村上貴聡・平木貴子・今井恭子・立谷泰久・平田大輔・須田和也・石井源信 (2010) : 心理技法活用尺度の作成 - 大学生競技者を対象として -. スポーツパフォーマンス研究 2 : 106 - 120.
- 佐藤 建 (2011) : スポーツと笑い - 笑いの必要十分条件 -. 笑い学研究 18 : 74 - 81.
- 志水 彰 (2000) : 笑い その異常と正常. 勁草書房
- 辰本頼弘 (2002) : 場の違いによる笑いの量の変化

- 女子学生グループと女子学生対高齢者の比較 -. 関西福祉科学大学紀要第5号 : 169 - 177.

辰本頼弘 (2016) : 特別養護老人ホームでの運動プログラム実施における研究 (第3報) - ゲームプログラム中の笑い -. 追手門学院大学社会学部紀要第10号 : 45 - 51.

資 料

障がい者シンクロ実施者の特性

巽 樹 理 住 田 健

追手門学院大学

静岡産業大学

Characteristics of disabled person participating in synchronized swimming

Juri Tatsumi

Otemon Gakuin University

Ken Sumida

Shizuoka Sangyo University

Abstract

The purpose of this study was to investigate characteristics of disabled individuals who were eagerly involved in synchronized swimming. Data were collected by using questionnaires that were designed to assess demographics, reasons for beginning synchronized swimming, perception of attractiveness of synchronized swimming, and experiences of swimming or aquatics. This study showed the characteristics of the swimmers. As interesting results, the participants were a variety of disabilities such as Down's syndrome, autism, and amputees. 61.8% of them have continued to do synchronized swimming less than five years. The findings of this study contributed to further understanding of synchronized swimming of disabled individuals.

キーワード : 障がい者シンクロ, 生涯スポーツ, シンクロナイズドスイミング

Keywords : disabled individuals, lifelong, sports, synchronized swimming

※巽 樹理 (追手門学院大学基盤教育機構講師, スポーツ研究センター)
住田 健 (静岡産業大学経営学部講師)

1. 緒 言

2016年9月に開幕されたりオパラリンピックでの獲得メダル数は、銀メダル10個、銅メダル14個という輝かしい成績であった。さらに陸上のリレー種目やボッチャでのメダル獲得に代表されるように日本人選手の活躍とNHKなどのメディアが取りあげたこともあり、障がい者スポーツへの関心はより高くなっている。また、障害のある方が気軽にスポーツを楽しめる機会や環境も整いつつある。

近年、障がい者でも気軽に行うことができるスポーツとしてシンクロナイズドスイミング（以下シンクロ）が注目されはじめている。注目される要因には、次の4つがあげられる。①水深の浅い（約1.1～1.2m）一般的なプールで行うことができる（田中, 2005）、②障害の内容によって演技を自由に構成できる（小林ほか, 2014）、③障がい者シンクロの運動強度は、軽い～中等度の運動であるといえる（小林ほか, 2014）、④デュエットやチームなどの複数人構成では、半数以上が障がい者であれば良く、健常者と共に演技者ができる（森田, 1999）、という4点である。気軽に誰でも取り組むことができるため、健康の維持・増進につながる有益な水中運動として今後も注目度が増すであろう。

日本障害者シンクロナイズドスイミング協会（2016）によれば、障がい者シンクロの発足は、1988年の全国身体障害者スポーツ大会「愛とふれあいの京都大会」である。この大会で、はじめて障がいのある人とない人が共に演技するシンクロが発表された。1992年には、京都市内で第1回障害者シンクロナイズドスイミングフェスティバルが開催された。その後、毎年継続開催されており、2016年では25回記念大会を迎えた。参加者数も第1回大会の52名に対し、現在は300名前後の参加者に増員している。このことから、障がい者シンクロが少しずつ社会に認知されていることがうかがえる。

これまでのスポーツは、伝統的なスポーツの価値観である「より速く、より強く、より高く」を土台に発展してきたものであり、障がい者スポーツは、この伝統的なスポーツの中では重要なものとして扱われてこなかったと言える。しかし、障がい者シンクロは1992年から大会が開催されており、また、その競技特性からも障がい者スポーツの発展・普及への潜在的な貢献度は高いと言える。本研究では、障がい者シンクロを障がい者スポーツの発展・普及に貢献できるスポーツとして考える。

障がい者シンクロの今後の発展と拡充を考える際に、実施者の特性を知ることは重要であろう。しかしながら、障がい者シンクロ実施者の情報は十分に世の中に広まっていないのが現状である。したがって本研究の目的は、障がい者シンクロ実施者の特性を明らかにし、今後の研究に向け基礎資料を作成することである。具体的には、明らかにする実施者の特性、年齢とシンクロ経験、シンクロを始めたきっかけ、継続要因、魅力要因、パラリンピックへの競技化への意識である。

2. 研究方法

2. 1 研究対象

本研究の対象者は、京都市内にある障がい者シンクロクラブの参加者（n=34）である。全対象者のうち12人は介護者（介助者）であり、残りの22人は何らかの障がいを抱えながらシンクロを行っていた。

2. 2 調査実施日時・場所・実施方法

調査実施日時は2016年8月14日であり、実施場所は京都市内にある障害者スポーツ施設であった。調査方法は、留置法による質問紙調査で、練習後に施設のフロントにて調査票を配布し、回答後にその場で回収した。クラブの代表者から研究の趣旨説明と協力要請を行ってもらい、同意を得た者を対象に調査を行った。

2. 3 調査項目

調査項目は、基本的属性、障がい者シンクロをはじめたきっかけ、継続要因、魅力要因、水泳経験の有無、障害区分、パラリンピック正式競技化への意識調査である。測定方法は、「きっかけ」は12項目の複数回答、また「継続要因」「魅力要因」は、各10項目の、同じく複数回答とした。

2. 4 分析方法

分析は記述統計による度数分布を作成することで、障がい者シンクロの実施者特性の把握を試みた。

3. 結果及び考察

3. 1 基本的属性

3. 1. 1 年代と障害区分（表1, 2）

本研究の対象である、障がい者シンクロクラブの実施者34名は、介助者を含めて全て女性であった。各年代は

表1に示す通りであり、50代が20.6%と最も多く、次いで20代14.7%であった。また平均年齢は46.3(±21.6)歳であったが、小学生から高齢者まで、全体的に幅広い年代の方が実施しており、10代、20代を中心とする競技シンクロや、20歳以上が対象のマスターズシンクロよりも、障がい者の生涯スポーツとしてシンクロという競技が幅広く網羅されていることが分かる。さらに表2は、年齢カテゴリーと障害区分のクロス集計を示したものである。

表2 年代と障害区分のクロス集計

障害区分	9歳以下	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	合計
下肢障害								4(%)	4(100)
上下肢障害						1(50.0)		1(50.0)	2(100)
脳原性マヒ以外の車いす使用者				1(100)					1(100)
脳原性マヒによる肢体不自由者			1(33.3)	2(66.7)					3(100)
療育手帳所持者(知的障害者)	1(9.1)	4(36.4)	4(36.4)	1(9.1)		1(9.1)			11(100)
障害のないもの					2(15.4)	5(38.5)	4(30.8)	2(15.4)	13(100)

知的障害のある実施者は、30代以下が90.9%と比較的若年層が多い。また、その母親は「障害のないもの」として多くの方がシンクロを実施していた。また下肢障害の4名(100%)は車椅子利用者が2名、股関節障害を持つ者が2名であった。障がい者シンクロのデュエットやチームなどの複数人で構成する演技は、健常者と障がい者の混合であることが多い。特に、障害を持つ子どもの多くは健常の親(特に母親)と共に実施している実態が明らかとなった。

3.1.2 障がい者シンクロ継続歴(表3)

シンクロ継続歴では、5年未満が21名(61.8%)と最も多い。すなわち、過半数以上の者が経験の浅い実施者であった。一方で20年以上の実施者も7名(20.6%)おり、クラブ開設当初から長期にわたり実施していることがうかがえる。

表3 障がい者シンクロ継続歴

	n=34(100%)
5年未満	21(61.8)
10年未満	2(5.9)
15年未満	2(5.9)
20年未満	1(2.9)
20年以上	7(20.6)
未記入	1(2.9)

表1 障がい者シンクロ実施者の年代

	n=34(100%)
9歳以下	1(2.9)
10代	4(11.8)
20代	5(14.6)
30代	4(11.8)
40代	2(5.9)
50代	7(20.6)
60代	4(11.8)
70歳以上	7(20.6)

3.2 きっかけ、継続、魅力要因について

(表4, 5, 6)

表4は、障がい者シンクロを始めたきっかけに関する結果を示したものである。最も多く回答されたのは、友人・仲間からの誘い(n=23, 67.6%)であった。次いで、運動不足解消のため(n=9, 26.5%)、シンクロに興味があったため(n=7, 20.6%)となった。障がい者シンクロを始めるか、否かは重要な他者となる友人・仲間の存在が大きいことが示唆された。

表4 障がい者シンクロのきっかけについて

	n(%)
1. 友人・仲間からの誘い	23(67.6)
2. 友人・仲間との交流	2(5.9)
3. 健康のため	5(14.7)
4. シンクロに興味があった	7(20.6)
5. 減量や体重維持のため	4(11.8)
6. ストレス解消・気分転換	3(8.8)
7. 運動不足解消	9(26.5)
8. レクリエーション・娯楽	6(17.6)
9. リハビリ・治療のため	6(17.6)
10. 水泳の延長で	5(14.7)
11. 目標や生きがいを見つけて	4(11.8)
12. 指導者からの勧誘があったため	6(17.6)

※データは複数回答による

次に、シンクロを継続することにおいて何が重要になるのかを調べた(表5)。その結果、時間的に余裕があること(n=23, 67.6%)、次いで、金銭的なこと(余裕

があること)となった(n=9, 26.5%)。障がい者シンクロの実施を継続していくには、まず実施者個人の時間的、金銭的資源が大きく影響することが示唆された。

興味深い点としては、使いやすいプールがあることという回答が14.7%あったことである。障がい者シンクロは、障がい者(介助者も含む)が行うという特性上、利用するプールには入退水用のはしごや、水中まで安全に車椅子を運ぶことができるスロープの設置などが求められる。機能的に利用しやすいプールが障がい者シンクロ実施者の近くにあることがシンクロ継続の重要な要因になっていることが考えられる。

表5 継続要因について n (%)

	n (%)
1. 時間的に余裕があること	23(67.6)
2. 自身が健康であること	2(5.9)
3. 仲間がいること	5(14.7)
4. 大会に出場できること	7(20.6)
5. 相談できるサポートが必要	4(11.8)
6. 指導(者)が充実していること	3(8.8)
7. 金銭的なこと	9(26.5)
8. 家族の理解や介護	6(17.6)
9. 目標があること	6(17.6)
10. 使いやすいプールがあること	5(14.7)

※データは複数回答による

障がい者シンクロの実施者が、感じている障がい者シンクロの魅力について調査したところ(表6)、音楽に合わせての動作が楽しい(n=29, 85.3%)が最も知覚されている魅力であることがわかった。次に、仲間とのコミュニケーションがとれる(n=23, 67.6%)、良い指導者がいる(n=20, 58.8%)、健康に良い(n=16, 47.1%)が続く結果となった。対象者は、シンクロそのものが楽しいと感じており、シンクロを通じて、仲間とのコミュニケーションも楽しんでいることがわかる。また、現在の指導者の存在にも魅力を感じており、障がい者シンクロの普及・発展を考える際には、魅力的に感じてもらえる指導者の養成についても一考することが必要になるのかもしれない。

表6 障がい者シンクロの魅力について n (%)

	n (%)
1. 障がい者シンクロ大会の開催	5(14.7)
2. 芸術(魅せる)スポーツ	7(20.6)
3. 技術(フィギュアや演技)の習得	9(26.5)
4. 健康(身体)に良い	16(47.1)
5. 頭を使うことで老化防止になる	4(11.8)
6. 音楽に合わせての動作が楽しい	29(85.3)
7. 目標があり、やりがいがある	10(29.4)
8. 仲間とのコミュニケーションがとれる	23(67.6)
9. 良い指導者がいる	20(58.8)
10. その他	1(2.9)

※データは複数回答による

3. 3 過去の水泳の有無

シンクロを始める前の水中運動経験を確認するために、過去の水中運動実施の有無について質問をした(表7)。その結果、何らかの水中運動を実施していた者が15名(44.1%)、水中運動の未経験者が19名(55.9%)であった。これらの結果から、障がい者シンクロ実施者の半数以上は水中運動未経験者であることが示唆され、ある程度の泳力がある者がシンクロを始めることが多い競技シンクロやマスターズシンクロと異なる傾向であることが分かった。

表7 障がい者シンクロ前の水中運動実施の有無

	n (%)
水中運動の経験者	15(44.1)
水中運動の未経験者	19(55.9)

3. 4 パラリンピックへの競技化について

障がい者シンクロがパラリンピックの競技として採用されると仮定した時の賛否を調べた(表8)。大いに賛成と答えた者が27名(79.4%)であり、どちらかという賛成が6名(17.6%)であった。本研究の対象者に限って言えば、障がい者シンクロがパラリンピックの正式競技に採用されることが大いに望まれていることが示唆された。

表8 パラリンピックへの競技化について意識調査

	n (%)
大いに賛成	27(79.4)
どちらかという賛成	6(17.6)
どちらかという賛成という反対	0(0.0)
(競技化に)反対	0(0.0)

まとめ

本研究の目的は、障がい者シンクロ実施者の特性を明らかにし、今後の研究に向け基礎資料を作成することであった。まず、本研究が示すことができた結果として、障がい者シンクロ実施者は多様であることがあげられる。本研究の対象者は34名と比較的少ないサンプル数である。しかし、障害者区分を見てみると、上肢や下肢などに何らかの障害を持つ身体的障害者、ダウン症などの知的障害者、そして、彼女達の実施をサポートする介助者に分けられる。シンクロ継続に関しては、5年未満のカテゴリーと20年以上のカテゴリーの2極化がみてとれた。

本研究の貢献としてあげられるのは、部分的ではあるが、障がい者シンクロ実施者の特性を明らかにしたことである。今後の研究課題として次のことがあげられる。まず、さらなる調査を行い、障がい者シンクロ実施者に関する基礎的資料の信頼性を高めることである。本研究の対象者は34名と決して十分とは言えるサンプル数ではない。継続したデータ収集が今後必要であろう。

次に、本研究は収集されたデータに基づいて度数分布表を作成したのにとどまっている。今後はさらに詳細な分析方法を用いて検証することが必要である。例えば、2変数の連関を調べるために、クロス集計を用いた分析なども有効であろう。

参考文献

- 小林敏枝・加藤光朗・田中秀明（2014）障害児・者に対する水中運動の影響について：障害者シンクロナイズドスイミングの効果について、清泉女学院短期大学研究紀要32：1-10.
- 森田美千代（1999）障害者シンクロナイズドスイミングの現状、水泳・水中運動科学4：21-24.
- 日本障害者シンクロナイズドスイミング協会（2016）第25回シンクロナイズドスイミングフェスティバルプログラム、日本障害者シンクロナイズドスイミング協会：京都.
- 田中千晶（2005）実践水中運動、北川薫編、健康運動プログラムの基礎、市村出版：東京, pp.108-121.

【追手門学院大学スポーツ研究センター紀要】刊行内規

(目的)

第1条 追手門学院大学スポーツ研究センター紀要（以下「紀要」という）は、追手門学院大学スポーツ研究センターにおける活動成果の発表を主な目的として、これを刊行する。

(編集等の機関)

第2条 紀要の企画、原稿の募集および編集は、スポーツ研究センター紀要編集委員会（以下「委員会」という）が行い、発行はスポーツ研究センターが行う。

2. 所員全員が編集委員となり、編集委員長はセンター長が兼務する。

(執筆者の資格)

第3条 執筆の資格を有する者は次の各号に掲げる者とし、執筆は公募とする。

- (1) スポーツ研究センター所員
- (2) スポーツ研究センター研究員
- (3) センター会議にて推薦または承認を得た者

(原稿の要件)

第4条 紀要に執筆する原稿の要件は、次の各号のとおりとする。

- (1) 他誌に未掲載の原稿であること。
- (2) 完成原稿であること。
- (3) 原稿の種類は次のいずれかに該当するものであること。
 - ①論文
 - ②研究ノート
 - ③資料
 - ④書評
 - ⑤その他、紀要の編集上必要と認められるもので、センター会議にて承認を得た原稿
- (4) 投稿原稿は、題目提出の時点で、同一言語、同一内容のものが他誌で公表されてはならない。その後、他誌で掲載されることが決定した場合には、速やかに原稿を取り下げる。なお、本紀要刊行ののちに、書籍などに再掲することは妨げない。ただし再掲の場合は、必ず初出を明示すること。

(原稿の採択)

第5条 委員会は、執筆原稿の掲載についての判断を行う。

2. 委員会で指名された担当者が原稿を査読し、第4条の原稿要件に関する確認、ならびに修正等の措置が適切に行われた原稿を採択する。

(紀要の発行)

第6条 紀要は、各年度1回発行することとし、各年度の原稿募集・執筆期限・発行日等は委員会が決定し、公表する。

2. 原則として紙媒体の冊子による発行を行わず、追手門学院大学機関リポジトリならびにCiNii（国立情報学研究所論文情報ナビゲーター）への掲載のみとする。

(原稿の形式)

第7条 紀要に投稿する原稿の形式は、委員会が定める「スポーツ研究センター紀要執筆要領」によるものとする。

(校正)

第8条 校正は著者校正とし、校正期限を遵守し、校正時に大幅な訂正を行わないこととする。

2. 執筆者が前項の規定に反した場合、第5条の規程を準用する。

(抜刷)

第9条 抜刷の費用は申込者の負担とし、具体的な申込部数と価格は、別途定める。

(著作権)

第10条 紀要のすべての掲載物の著作権は、追手門学院大学スポーツ研究センターに帰属するものとする。

(改廃)

第11条 この内規の改廃は、委員会の議を経て、センター会議で行う。

附 則

この内規は、2015年10月1日から施行する。

この内規は、2016年10月1日から施行する

2016年度 追手門学院大学スポーツ研究センター所員・研究員

センター長	松 井 健 (基盤教育機構 教授)
副センター長	巽 樹 理 (基盤教育機構 講師)
所 員	金 森 喜久男 (経営学部 教授)
	坂 崎 貴 彦 (研究・社会連携課 課長)
	辰 本 頼 弘 (基盤教育機構 教授)
	千 葉 英 史 (基盤教育機構 准教授)
	豊 島 眞 介 (基盤教育機構 教授)
	中 西 宏 (学生課)
	福 井 純 平 (理事長・学長室)
	森 田 学 (教務課 係長)
研 究 員	高 島 孝 之 (医療法人高島整形外科 院長)
	吉 田 良 治 (追手門学院大学 客員教授)

追手門学院大学スポーツ研究センター紀要 第2号

2017年3月発行

発 行 追手門学院大学スポーツ研究センター

〒567-8502 大阪府茨木市西安威2-1-15

☎072-641-9690 FAX 072-641-9695

印 刷 川西軽印刷株式会社

〒540-0005 大阪府大阪市中央区上町A番22号

☎06-6761-5768 FAX 06-6762-2772
